『土左日記』一月七日

原　由来恵

はじめに

平成二六年度本学大学院講義（中古文学特殊講義①）において、『土左日記』[注1]を通読してきた。講義目的は、『土左日記』のストラテジーを各期日ごとのテクストから読み解いていくというものであった。

既知のとおり、『土左日記』には、テクストとして平安期成立の文学作品としては貴重な、作者紀貫之自筆本に準じるとする青谿書屋本が存する。作者とされる紀貫之は、『古今和歌集』の仮名序に顕れているように、歌人としてのみならず、歌論、仮名を使用した新しい文体としての仮名文作成などによって和歌興隆に尽力した人物である。

その紀貫之が晩年になって、『土左日記』という作品を世に送り出した意図はどのようなものであったのか。この真意を読み解くことは、これまでも諸先学が指摘されてきたとおり、後世の仮名文学への影響や当時の文学作品における生成の実際を紐解く一端になると考えられる。

これまで『土左日記』における研究は、作品が持つ特質から、

○自筆本に準ずる価値
○仮名文日記
○女性仮託
○亡き愛児への思い
○歌数と歌論展開
○土佐から帰京までの紀行状況
○『伊勢物語』との連関

などが、指摘されてきた。そして、日本語学からのアプローチ、作品の虚構論、紀行文学としての帰京までの旅程考察、『古今和歌集』『古今和歌六帖』『貫之集』などの掲載和歌との対照、『伊勢物語』関連記事にみる作者説などがなされてきたといえる。さらに、作品の本質について、なぜ女性に仮託して仮名文日記としたのかを起点に、貫之の執筆意図について『土佐日記全注釈』(注2)などをはじめとして、貴族子女へのテキスト的役割・亡き愛児への思いを漢文という制約をはずした仮名による自由表現の試み・コンテクストから見た作者とその援助者たちとの死別影響論・テクストの読みの可能性から照射した作品論などが示されてきた。また本稿で取り扱う「一月七日」の条についても、いくつかの論が提示されている。

残念ながら、本論執筆時の講義では、作品全体の読破には至ってはいない。しかしここまでの輪読から共に受講した二松学舎大学研究科の院生、藤田拓海氏・毛内遼氏・大村美紗氏・守屋未弓氏及び科目等履修生の高木究氏と多くの成果を見いだしつつある。そこで本論では、先行研究を踏まえつつも「一月七日」のテクストから見いだせる「歌物語」的テクスト構造に顕れる作品の虚構性と、言語遊戯という視座から『土左日記』の特質を踏まえて、その作品に込められた真意を、「一月七日」の、

①歌物語的構造
②言語遊戯
③歌論志向

という三つの視点から『土左日記』の一端を読み解く。またその周辺記述から窺える『土左日記』のストラテジー、つまりは「紀氏の回生」といった一つの私見を提示してみたい。

なお引用テクストは、青谿書屋本を底本に、講義内で行った翻刻と本文検討から校訂したものによる。

一、歌物語的構造

『土左日記』「一月七日」の本文は次のとおりである。

A七日になりぬ。同じ湊にあり。今日は白馬を思へどかひなし。ただ浪の白きのみぞ見ゆる。

かかる間に、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて鮒よりはじめて、川のも、海のも、こともものども、長櫃に担ひつづけておこせたり。若菜ぞ今日をば知らせたる。

歌あり。その歌、

淺茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつる若菜なりけり

いとをかしかし。

この池といふは所の名なり。よき人の男につきて下りて住みけるなり。この長櫃の物は皆人童までにくれたれば、飽き満ちて舟子どもは腹鼓をうちて海をさへおどろかして波たてつべし。

Bかくてこの間に事おほかり。今日わりごもたせてきたる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人歌詠まむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひいひて「波の立つなること」とうるへいひて詠める歌、

行く先にたつ白浪の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ

とぞ詠める。いと大声なるべし。持てきたる物よりは歌はいかがあらむ。この歌をこれかれあはれがれども一人も返しせず。しつべき人も交れれどこれをのみいたがり物をのみくひて夜更けぬ。この歌ぬし「またまからず」といひてたちぬ。ある人の子の童なるひそかにいふ。「まろこの歌の返しせむ」といふ。驚きて「いとをかしきことかな。よみてむやは。詠みつべくばはやいへかし」といふ。「まからずとて立ちぬる人を待ちてよまむ」とて求めけるを、「夜更けぬ」とにやありけむ、やがていにけり。

C「そもそもいかゞ詠んだる」といぶくしがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず。強ひて問へばいへる歌、

行く人もとまるも袖のなみだ河汀のみこそ濡れまさりけれ

となむ詠める。

かくはいふものか、うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。「童ごとにては何かはせむ。嫗・翁、手捺しつべし、悪しくもあれいかにもあれ、たよりあらば遣らむ」

とておかれぬめり。

この七日の記事は、掲載された三首の和歌ごとにひとまとまりの内容となって日記が形成されており、その各独立したものが連係をもって七日の全体の記事として構成されている。そこでテクストの構造を理解するために、それらに便宜上アル

ファベットA～Cを付しておく。

本文A～Cに見られるように、「一月七日」には、三首の和歌が登場する。それぞれの和歌の登場前後には、

○歌が詠まれるに至った経緯（和歌登場前）

○テクスト傍線部のような歌への評価及びその説明と、その後の状況（和歌登場後）

といった、一つのパターンによって一連の内容が紡ぎ出されている。それぞれを具体的に見ると、

A七日を想起する白馬と若菜、そこに添えられた歌の登場経緯。

「浅茅生の」歌とその詠み人「いけの女」に対する評価（傍線部）及び説明。さらに次のBにおける歌の下手な男との対比構造を築く伏線的役割。

B「歌詠まむと思ふ心」の男の歌を詠むまでの経緯。

そこに詠まれた「行く先に」歌に対する評価（傍線部）及び批判的説明。さらに前掲されたAを、まるで「雅」と「鄙」の対照を彷彿させる歌の対比として受けるとともに、次に続くCの子どもが詠んだとする歌を導き出す役割。

CBでの歌に対する童の「行く人」歌が詠まれるまでの経緯。

その歌に対する評価（傍線部）及び説明と顛末及び読者への規範的な和歌への導き。

となる。すると、この「一月七日」の記事に大きな疑問が存することにはならないだろうか。それは、この箇所が日次の記事として、はたして相応しいものなのかという点である。確かにその日にあった出来事として時系列に記録されていよう。しかし、三首の和歌をそれぞれ独立記事のようにしたてながら、関連的言葉の集約によって構成する方法。また歌への執心のごとく批評する態度や、読み手を意識したかのような歌の説明と歌論の展開。などが表出するのである。このような「一

月七日」のテクストにおける執筆態度は、歌を基軸として物語が展開され、時としてその補足的説明や、登場歌に対する登場人物の態度として示す歌への批評が記載される歌物語の構造に非常に類似する。

一見時系列に並ぶこのA～Cの記事展開は、それぞれの歌を基軸として語られており、それらが後述する連想の言語遊戯によって一つの物語を生成するかのような構成を持って記されているのである。

さらにもう一点謎がある。それは『土左日記』において掲載される和歌の基準である。『土左日記』全体を通じて示される歌は、そのときの感情や場に適合するものとして記される。しかしその一方で、本作品にそぐわない、値しないものと作者に判断された歌は、忘れて書かないといった手段を講じる場合がある。それにもかかわらず、手厳しく批判対象となる歌であっても、この「一月七日」に見えるように、時としては記載されるのである。これは『伊勢物語』に見られる特徴とも似通っている。例をあげるならば、『伊勢物語』一四段には、[注3]主人公である男と陸奥国女との逢瀬が描かれているが、その女が「せち」に男を思い詠んだ歌「なかなかに恋に死なずば桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり」に対して「歌さへぞ鄙びたりける」との評が挿入される。このように物語に載せる価値を見いだせぬ歌も、批判するために記す歌物語の様相と、『土左日記』は同様の展開を持つといえよう。

このことを踏まえてテクストに戻ると、A「いけの女」に関しては、詠まれた和歌にある「水もなきいけ」における「いけ」が地名であることの強調や、詠み人の境遇についてまで説明がなされる。Bでは、傍線部に見られる評価の和歌に着目すると痛烈な批判がされている。このような不適切かつ下手とする歌を、日記はなぜわざわざ書きとどめておく必要があったのだろうか。

テクストの構造からみるとB記載歌は、Aの「をかしかし」歌、Bの後に続くCの「行く人」歌との対比と連関が課せられている。また「行く人」歌を引き出す導入歌の役割をも担っていることは明白である。それでは、なぜこのような内容を記すに至ったのであろうか。

二、言語遊戯

「一月七日」には、歌物語的視点の他に随所に言語遊戯の表現が見受けられる。この遊戯意識は先行研究がすでに諧謔的特徴として指摘しているが、このような特性は「一月七日」の記事の始まりから窺うことができる。

「今日は白馬を思へどかひなし。ただ浪の白きのみぞ見ゆる。」底本の影印表記は、

あをむまをおもへとかひなしたゝなみのしろきのみそみゆる

としている。諸先学を踏まえ青谿書屋本を貫之自筆本に準ずる価値とみなすならば、ここで作者は白馬を仮名表記にしていたこととなる。ではこのような年中行事に関わる名詞の漢字表記を全て仮名にしていたかといえば、他日の記事と底本表記を見比べると疑わしい。例えば一二月二九日及び元日の記事には、正月の三が日に邪気を祓うために飲んだ「屠蘇」「白散」が登場するが「白散」のみが漢字表記となっている。その理由を鑑みたとき、後に続く

白散を、ある者、夜の間とて船屋形にさしはさめりければ、風に吹きならさせて、海に入れて、え飲まずなり

との言語遊戯関係が見いだせる。それは、風によって白波の海に散ってしまったという状態と漢字表記での「白散」が合致するといった洒落のめしである。この「百散」を仮名表記にできたとしても、言葉の面白さはない。このような性質を見いだしたとき、七日に表記された「あをむまをおもへとかひなしたゝなみのしろきのみそみゆる」も青海に立つ白波と白馬と

しながら「あおうま」とする言葉、この白・青に見る色のコントラストを踏まえた言葉遊びが成り立つ。さらにその後段には、「いけの名」といいながら「鯉はなくて鮒」といった遊びも垣間見られる。

さらに、「一月七日」の記事全体に着目すると、三首の歌それぞれに付随したエピソードにも連想的言葉遊びを介した連結が見られる。それは前掲本文に付した二重傍線箇所である。Aの記事には

この長櫃の物は皆人童までにくれたれば、飽き満ちて舟子どもは腹鼓をうちて海をさへおどろかして波たてつべし。

これらが、続くB・Cの展開を仄めかす。二重傍線部を見ると「童」の登場、さらに騒ぎ立てている様子を「波立つ」状況と表現している。これらはその後に続くBの歌の評価に対する「いと大声なるべし」に対応するとともに、童の活躍の暗示を想起させている。

さらに、ここでの歌詠みは女・男・童とされており、Cにおいては嫗・翁といった者までが言葉でではあるが登場する。つまりこの記事は、老若／男女、それぞれの対比をも生み出す構造としており、記事全体の構造にも言語遊戯が仕掛けられているのである。

このようなところからも、これらの記事が、記録や仮名における自己満足としての心情記載に特化したとするよりも、掛詞的発想と連想の言語遊戯を読み手に意識させた記述をとったものであり、その態度から、記事が計算されて展開しているとすることがむしろ穏当といえよう。

三、歌論志向

さて、ここまで「一月七日」記事の特徴は、歌物語的手法と言語遊戯によって本文構造が形成されていることを見いだした。それではなぜ「一月七日」は、このような記載方法をとって三首の和歌を掲載したのであろうか。

三首の和歌には、前述のとおり、それぞれに歌の評価が付されている。それらを見てみると、

A「いけの女」の歌「淺茅生の野邊にしあれば水もなき池につみつる若菜なりけり」

「いとをかしかし」（直接的評価）

B「行く先にたつ白浪の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ」

「いと大声なるべし。持てきたる物よりは歌はいかがあらむ。この歌をこれかれあはれがれども一人も返しせず」とした歌への批判。

執筆者とする女の感想と、周囲の歌と詠み人に対する態度（間接的評価）

C「行く人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ」

「かくはいふものか、うつくしければにやあらむ」（直接的評価）

が、それぞれ述べられる。

ではBの歌はなぜそこまでの悪評となったのか。この歌は、別れを惜しむために詠んだとしている。まず「行く先に立つ白波」である。ここには船旅の者が嫌うものが入り込んでいる。一つは既知のとおり、「立つ」は「絶つ・断つ」を連想させ旅立つ者には不吉な言葉である。さらに「行く先に立つ白波」自体が船旅する者が嫌うものであり、なるべくなら穏やかな青海原での航海を望むのが筋であろう。次に「白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ」であるが、「いと大声なるべし」そのままである。つまりここには自分一人の寂しさを一方的に押しつけてデフォルメしすぎて詠んでおり、別れを

惜しむ風情も何もない歌である。

Cの歌はBの歌とは正反対に別れの風情や情緒を顕していよう。では、これらの歌から何が見いだせるのか。

萩谷朴は『土佐日記全注釈』において、Bの和歌を『貫之集』の視点から次のように述べている。

他撰本『貫之集』巻七には、延喜七年乃至十年頃の貫之の旧作として、「君惜しむ涙落ちそふこの川の汀まさりて流るべらなり」という類歌がある。流れて袖を濡らす涙を川と見たて、その濡れひろがるさまを川の水かさが増すと譬えることは、事実としては、泣き声を波の音と比較するよりも一層誇張的な表現であるといわねばならないが、これは歌語として慣熟した常識的な用語であり、かつ穏やかな美しい語感を伴う表現であるから、その点で田舎歌仙の歌よりも優れているということになる。つまり、田舎歌仙の歌は、その作歌態度の押しつけがましさと内容の不穏当な点において、池の女性に劣り、その表現の生硬さと内容の粗放な点において幼女の歌に及ばぬことを指摘されたのである。

萩谷が指摘する『貫之集』当該歌は次の通りである。

兼輔の兵衛佐、賀茂川のほとりにて左衛門の官人御春有輔甲斐へ行くむまのはなむけによめる

720　君惜しむ涙落ち添ふこの川のみぎはまさりて流るべらなり

兼輔の兵衛佐が賀茂川のほとりで、左衛門の官人、御春有輔が甲斐の国に行くので、その餞別に詠んだ。

あなたの旅立ちを惜しんで泣く涙が加わり、この賀茂川の水量はふえて流れるようだ。

さて、この『貫之集』収載歌を見ると、たしかに童が詠んだ歌「行く人も」と類似する。ここでは、別れの寂しさを「涙」

で表現し、その別れの悲しみから涙する状況を汀の川の水をデフォルメするといった手法が取り入れられている。この手法は貫之が『古今和歌集』仮名序に展開した歌論における「人事」との適合が見られるのではなかろうか。(注4)

このことを踏まえ、改めて「一月七日」の三首を見るとA・Cの和歌は、その『古今和歌集』にも通ずる理念が見受けられる。しかしそれに対してBの歌は、場やメタファーとしての表現が相応しくない。

つまり、この記事には良い歌の例と悪い歌の例が提出され、

○言語遊戯性
○機知に富む
○場に相応しいこと

といった、紀貫之がたびたび述べる歌における言葉の重みが展開されているといえよう。

おわりに

「一月七日」は、歌物語的手法および言語遊戯によって言葉が紡がれ、記事のテクストにおける全体構造の形成がされていた。そしてその記事のテーマとなるものは、三首の歌を例示し、その場に適切な和歌を奨励するといった内容であった。

また『土左日記』には「一月七日」以外にも似たような構造によって展開する記事がいくつかある。つまり、日記形態を維持しながらも読み手を意識した構造といえる。それでは何故このようなものを日記として執筆したのか。

『古今和歌集』「仮名序」執筆から三十年。その中には文人排斥と摂関家の台頭安定が図られる時代でもあった。貫之も都から離れて土佐には六年間とどまり不遇であったことも事実である。その間に有力後見者であった醍醐天皇と藤原兼輔そし

て藤原定方の死などによって、『新撰和歌』の作成見込みもなくなる。都から遠く離れた六年間は、貫之にとっては、焦燥を抱かせるものであったに違いない。この都から離れた時間を取りもどす一つの手立てが、この『土左日記』であったのではなかろうか。

『土左日記』のストラテジーは「紀氏の回生」(注5)を狙った歌のための機転や感情を見直す紀貫之自らも認める歌に対する見識を生かした作品であるといった私見をも示して本稿を閉じる。

注記

(注1) 新典社影印叢書『土左日記』講義の底本とした青谿書屋本には、『土左日記』とあるため、本稿ではそのまま表記を踏襲した。

(注2) 萩谷朴『土佐日記全注釈』(角川書店)

(注3) 定家本系統性が静嘉堂文庫本をテキストとした。

(注4) 受講者の積極的なアプローチにより、様々な課題が見つかった。特に毛内遼氏は、紀貫之時代歌語から調査を行い、ここに採歌された歌語から、涙と「汀」「濡れ」の縁語的組合せとして一つのパターンに昇華した可能性を指摘した。それを基に講義内で精査し、ここに報告とその展開を示した。

(注5) 科目等履修生の高木究氏が「起死回生」になぞらえて、言語遊戯的発想を込め「紀氏の回生」という表現を提示し、講義内における受講者の一致で使用することとした。